

論 文

体育理論の模擬授業における省察の実態と課題に関する研究 ーリフレクション・シートの記述数に着目してー

○岡崎 祐介*1 大藤 潤也*1

キーワード：体育理論、模擬授業、省察、リフレクション・シート、保健体育科教育

1 はじめに

中央教育審議会¹⁾が令和4年12月に出した『「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について(答申)』では、『「理論と実践の往還」を実現するためには、単に学んだ理論を学校現場で実践するのみならず、自らの実践を理論に基づき省察することが必要になってくる』と述べられている。「理論と実践の往還」は2007年3月に文部科学省から教職大学院設立に関する省令等が公布されて以降、同制度の中核的な理念とされている。

近年、教師の専門職像に関して、「技術的熟達者」(technical expert)と「反省的实践家」(reflective practitioner)の2つの考えが対立して並置され、教師教育改革の議論を枠づけている²⁾。この枠組みを提起したのがドナルド・ショーン(Donald A.Schön)である。柳沢³⁾によると、ショーンは複雑で難解な実践の状況に働く高度で総合的な見識が必要な教師といった専門職においては、「反省的实践家」(reflective practitioner)という新しい専門家が重要なことを説いている。このショーンの考えは日本にも紹介され、佐藤⁴⁾は専門職としての教師は「反省的实践家」としての成長が求められており、この「反省的实践家」の中核をなすものが「省察(reflection)」であるとしている。

つまり、反省的实践家としての成長は、授業を「リフレクション」すること、そして「リフレクション」そのものを促進していく過程が重要となる。これらの指摘を受けて、近年、教員養成系の大学では、実践的指導力の向上のために模擬授業を取り入れた授業が多

く実施されるようになっており、その中でも「省察(reflection)」を用いた研究が散見される⁵⁾。

例えば、藤田ほか⁶⁾や木原ほか⁷⁾が大学学部生に対して行った体育科模擬授業を対象にした研究や村井⁸⁾や日野・谷本⁹⁾が教育実習等で実際に児童生徒に教えた経験を対象にした研究など多くの実践研究がみられる。その中でも久保・木原¹⁰⁾は、体育科教育における「リフレクション」に関する研究を整理しており、「自己の実践を対象としたリフレクション」と「他者の実践を対象としたリフレクション」が混在している研究があることに言及している。また、川口・岩田¹¹⁾は、体育科の模擬授業において、「他者の実践を対象としたリフレクション」に着目し、模擬授業を通して対象者の「リフレクション」する力の変容に注目している。

中川ほか¹²⁾はこのことについて、教員養成における「各教科の指導法」においては、学生が授業者として模擬授業を実践する回数が限定されることから、「他者の実践を対象としたリフレクション」をよりどころにして、自己の「リフレクション」する力を深めることが肝要となると述べている。また、保健の模擬授業に着目すると、山田ほか¹³⁾は、現職の保健体育科教員に行った保健の授業の実態調査の結果、保健の授業時間が十分に確保されていないこと、保健の授業が体育の授業に振り替えられること、保健の授業研究が十分になされていないことなどを報告している。また、高井¹⁴⁾は保健学習に関する研究において、模擬授業を繰り返すことで、教師の授業技術に関する見目が養われることを報告している。

*1 至誠館大学 現代社会学部

以上のことから、教員養成における保健学習では中川ほかが他者の模擬授業を対象としたリフレクションに着目した研究を行っているが、体育理論学習と「リフレクション」の関係における先行研究を概観すると、他者の授業実践に着目した研究はいまだ少ない。

そこで本研究では、中学校の保健体育科における体育理論の模擬授業の実践を通して、「他者の授業実践のリフレクション」に着目し、体育理論の模擬授業の実態と課題を明らかにすることを目的とする。

2 研究の方法

2-1 調査対象者と調査時期

調査対象は、私立S大学3年次前期開講の「保健体育科教育法Ⅲ」の受講者18名とし、中高保健体育教諭一種免許状の取得を目指している学生である。

対象とした授業は、「各教科の指導法に関する科目」担当の専任教員2名によって協同的に展開した。なお、表1はS大学における「各教科の指導法に関する科目」と教育実習関連科目の概要を示している。

2-2 調査内容および調査方法

本研究では、表1の中における「保健体育科教育法Ⅲ」に限定して研究を行った。次に、表2は、「保健体育科教育法Ⅲ」（以下、本授業と略記）の授業計画について示している。

本授業は、講義形式と模擬授業形式の授業方法によ

って構成されている。表3は、模擬授業の日程を示している。全15回の授業のうち、第12回までは主に体育実技の模擬授業を行い、第13回および第14回を今回の研究対象とする体育理論の模擬授業とした。なお、単元は担当教員が設定した。また、模擬授業は受講者ができるだけ多くの模擬授業を実施できるよう、1回の授業あたり2名の授業者を設定し、授業時間は1名あたり30分間とした。そのため、1回の授業は模擬授業A→協議会①→模擬授業B→協議会②という流れで実施した。

2-3 協議会の進め方

模擬授業後には必ず協議会を行い、担当教員が協議会を運営した。協議会では、授業者による自己評価を述べた後、生徒役（観察者）の学生が一人ずつ模擬授業に対する感想・コメントを述べた。そして、最後に担当教員2名が総括の助言をするという流れで実施した。

さらに、授業者は模擬授業終了後に「リフレクション・シート」（以下、「RS」と略記）を作成し、生徒役には模擬授業開始時に「RS」を配付し、随時記入するように指示した。

表1 S大学における「各教科の指導法に関する科目」と教育実習関連の科目の概要

学年	科目名	主な内容
2年次	保健体育科教育法Ⅰ	保健体育科教育概論
	保健体育科教育法Ⅱ	教材構成論/保健の模擬授業の実践
	保健体育科教育法Ⅲ	体育実技・体育理論の模擬授業の実践
3年次	保健体育科教育法Ⅳ	体育実技の模擬授業の実践 および市内中学校との連携授業
4年次	教育実習事前事後指導	教育実習前の指導及び事後の指導
	教育実習	3週間の教育実習（主に母校実習）
	教職実践演習	講義、模擬授業等

表2 「保健体育科教育法Ⅲ」における授業計画

時間	内容	時間	内容
1	●オリエンテーション	9	
2	●学習指導要領における体育および体育理論の位置づけ	10	模擬授業 体育
3	●学習指導案の書き方/RSの記入の仕方	11	
4		12	
5		13	模擬授業 体育理論
6	模擬授業 体育	14	
7		15	●授業の総括
8			

※上記の「●」は講義形式の授業を示している

表3 模擬授業の日程と主な内容

日程	前半	後半	日程	前半	後半
回数	授業者A	授業者B	回数	授業者A	授業者B
5月9日 (1回目)	体づくり運動	集団行動	6月27日 (7回目)	マット運動	跳び箱
5月16日 (2回目)	マット運動	跳び箱	7月4日 (8回目)	バレーボール	—
5月23日 (3回目)	ソフトボール	ハードル走	7月11日 (9回目)	柔道	ダンス
5月30日 (4回目)	バスケットボール	サッカー	7月18日 (10回目)	体育理論 (スポーツへの多様な関わり方)	体育理論 (スポーツが心身と社会性に及ぼす効果)
6月6日 (5回目)	バレーボール	バドミントン	7月25日 (11回目)	体育理論 (オリンピック・パラリンピックと国際社会)	体育理論 (生涯スポーツの見方・考え方)
6月13日 (6回目)	ダンス	体づくり運動			

※模擬授業は一人30分で実施

2-4 リフレクション・シートの概要

本授業の模擬授業後には、学生たちに「RS」を記入させた。「RS」は、岩田ほか¹⁵⁾や藤田ほか¹⁶⁾の先行研究を参考に担当教員2名で協議して再構築した。

作成した「RS」の項目は、「授業の計画」、「授業の運営」、「教授行為」、「教材」、「その他」の5つのカテゴリを設定した。また、各カテゴリにおいて、「事実と評価」、「評価の理由」、「改善策」の3つの段階に分けて記述させた。

2-5 分析の視点

本研究においては、生徒役の学生が作成した「RS」を分析対象とした。そして、以下の2つの視点に基づ

き分析を行った。なお、他者の実践を対象とした「RS」を対象としたため、授業者の「RS」は調査対象とせず、また、数名の欠席者や提出した「RS」の内容に不備のあった学生がいたことから、対象となったシートは4回の授業のうちいずれも11枚であった。

1) 5つのカテゴリにおける記述数とその割合

分析対象としたすべての「RS」における各カテゴリ内の記述をカウントし、各回の模擬授業における5つのカテゴリの記述数の占める割合を求めた。

2) 「リフレクション・シート」の記述内容の分類

「RS」に記述された学生の「リフレクション」の内容を把握するために、5つのカテゴリにおける「事実と評価」、「評価の理由」、「改善策」の3点について

学生の代表的な記述内容を抜き出し、「事実と評価」においては長田ほかの先行研究をもとに授業構成力（目標やレベルなどの内容、流れや時間配分などの指導過程）、教材研究力（関連知識・背景知識、ワークシート、資料・教材）、授業展開力（教師の言葉遣い・板書、生徒対応）として3つの能力カテゴリーに再構築し、分析を行った。

3 結果

3-1 5つのカテゴリーにおける記述数とその割合

表4は、5つのカテゴリー（「授業計画」、「授業の運営」、「教授行為」、「教材」、「その他」）における記述数とその割合を示している。全4回の体育理論の模擬授業において、「事実と評価」、「評価の理由」に比べ、「改善策」の記述数が少なかった。

また、「事実と評価」において、「教材」への記述数は他のカテゴリーに比べ少ないことが窺えた。

本結果では、体育理論の模擬授業を重ねるごとの各カテゴリーの記述割合の変容はみられず、いずれのカテゴリーにおいても同様の傾向がみられた。

3-2 「リフレクション・シート」の記述内容の分類

表5から表9は、5つのカテゴリーにおける代表的な記述例を示している。5つのカテゴリーにおいて、いずれも模擬授業を重ねるごとに記述数に変容はみら

れなかった。しかしながら、例えば「授業計画」において、1回目から4回目へと模擬授業の回数を重ねるにつれて、記述の内容がより具体的になっていく傾向がみられた。

また、各模擬授業における能力カテゴリーの記述数の割合を図1に示した。授業構成力は、1回目が32文（46.4%）、2回目が28文（41.2%）、3回目が26文（39.4%）、4回目が25文（37.3%）と模擬授業の回数を重ねるごとに記述数の割合が減少する傾向にあった。教材研究力は、1回目が14文（20.3%）、2回目が15文（22.1%）、3回目が10文（15.2%）、4回目が18文（26.9%）と全体的に記述数の割合が低い傾向にあった。授業展開力は、1回目が23文（33.3%）、2回目が25文（36.8%）、3回目が30文（45.5%）、4回目が24文（35.8%）と3回目の模擬授業では最も多い記述数の割合を占めたが、概ね30%～35%の記述数の割合を占めていた。

4 考察

本研究では、中学校および高等学校の保健体育科教員免許の取得をめざす学生を対象として、中学校体育理論の模擬授業における「他者の実践を対象としたリフレクション」に焦点を当て、5つのカテゴリーにおける記述数とその割合や、記述内容および各回の能力カテゴリー別の記述数の割合を分析した。

表4 5つのカテゴリーにおける記述数とその割合

項目	記述する際の主な視点	事実と評価				評価の理由				改善策			
		第1回	第2回	第3回	第4回	第1回	第2回	第3回	第4回	第1回	第2回	第3回	第4回
授業の計画	・授業のねらいと内容は合致していたか ・計画通りに進めていたか	14	14	15	14	14	13	13	14	6	6	6	4
		20.3%	20.6%	22.7%	20.9%	21.5%	20.3%	20.3%	22.2%	18.8%	17.6%	17.1%	12.9%
授業の運営	・時間配分は適切だったか ・生徒の反応を確認し必要に応じた対応ができたか	16	15	16	16	15	15	15	15	7	9	7	7
		23.2%	22.1%	24.2%	23.9%	23.1%	23.4%	23.4%	23.8%	21.9%	26.5%	20.0%	22.6%
教授行為	・雰囲気づくりができていたか ・声の大きさやスピードは適切だったか ・わかりやすい説明だったか	17	15	16	15	13	13	13	13	5	5	8	8
		24.6%	22.1%	24.2%	22.4%	20.0%	20.3%	20.3%	20.6%	15.6%	14.7%	22.9%	25.8%
教材	・学習効果を生み出すような教材・教具が提供されているか ・教材に対する工夫がみられたか	10	12	8	10	11	12	11	10	8	7	7	5
		14.5%	17.6%	12.1%	14.9%	16.9%	18.8%	17.2%	15.9%	25.0%	20.6%	20.0%	16.1%
その他	・私語等を注意していたか ・生徒一人ひとりに気配りができていたか	12	12	11	12	12	11	12	11	6	7	7	7
		17.4%	17.6%	16.7%	17.9%	18.5%	17.2%	18.8%	17.5%	18.8%	20.6%	20.0%	22.6%
合計		69	68	66	67	65	64	64	63	32	34	35	31

全4回における5つのカテゴリーの記述数に関しては、「事実と評価」「評価の理由」については60文以上の記載がなされていたが、「改善策」については約半

数の30文程度であった。齊藤¹⁷⁾によると、模擬授業を複数回行って、生徒役の改善点に関する記述数は増加しないことが報告されており、今回も先行研究と

表5 「授業計画」に関する主な記述内容

授業回数	事実と評価	能力カテゴリー別の記述数と割合	評価の理由	改善策
1	授業のねらいを説明していた	14	導入部分で授業の内容や目標を伝えていた	授業のテーマや目標について具体的に説明した方がよい
	指導案通りに進められていなかった	24.6%	パワーポイントを省いたりして計画通りにできていなかった	必要なパワーポイントを厳選して準備する必要がある
2	授業のねらいと内容が明確だった	14	スムーズに授業を展開できていたのでよかった	パワーポイントの文字をもう少し大きくした方がよい
	評価規準を伝えていた	24.6%	「ねらい」を伝えることでスムーズな導入ができていた	もっと具体的な話題から授業を進めた方がよい
3	指導案に書いてあることと話す内容が違っていた	15	話す内容を忘れていたから	自分が伝えたいことを紙にまとめておく
	授業の最後にもう一度ねらいを確認していた	26.3%	丁寧に生徒の様子をみていた	理解しているか生徒の様子をしっかりとみる
4	導入の部分で内容と異なる話をしていた	14	授業のつながりを意識できていないから	自分が話すことをしっかりと準備しておく
	指導案の評価規準が内容と合っていないように思った	24.6%	評価する場面が適切でないと思うから	ねらいと評価の関係をしっかりと考える

表6 「授業の運営」に関する主な記述内容

授業回数	事実と評価	能力カテゴリー別の記述数と割合	評価の理由	改善策
1	生徒の反応を確認して対応できていた	16	説明がわかりやすく授業の内容をつかみやすかった	質問されたら答えるのが苦手なので克服していきたい
	まとめを短くしてわかりにくかった	25.4%	大事な部分の説明が省略されていた	時間配分をしっかりと行い、省略部分がないように
2	生徒の反応にきちんと対応できていたと思う	15	生徒の反応に対して丁寧に説明をしていた	生徒に問いかける場面を増やしてもよいと思う
	時間配分は適切だったと思う	23.8%	生徒に問いかけながら授業の対応ができた	生徒の反応に対してもう少し具体的に返答したい
3	生徒が質問してきた際にうまく対応できていたと思う	16	生徒の発言に対してきちんと答えていた	考えさせる時間を設け、話し合いをさせてもよかった
	生徒の理解度を確認しながら進めていた	25.4%	生徒がわかっているか確認しながら授業を進めていた	もう少し教師が明るく授業をする
4	生徒の反応にきちんと対応できていたと思う	16	臨機応変に対応できていた	生徒の意見に対して的確に返答したい
	時間配分は適切だったと思う	25.4%	生徒に問いかけながら授業をしていた	生徒の反応をうかがって進めた方がよい

表7 「教授行為」に関する主な記述内容

授業回数	事実と評価	能力カテゴリー別の記述数と割合	評価の理由	改善策
1	声の大きさやスピードが適切だった	17	説明がわかりやすく授業の内容をつかみやすかった	生徒の雰囲気や良くなる方法を考えていきたい
	生徒一人一人に話を振っていた	27.0%	大事な部分の説明がわかりやすかった	生徒の方を見て話すことをすればよいと思う
	パワーポイントの使い方がよかった			大事な部分を強調して書くべき
2	声の大きさやスピードはよかった	15	先生の実験が多く、生徒も授業に入りやすかった	生徒にもっと発言させる授業にしてもよかった
	少し早口になっていた	23.8%	生徒に語るばかりになっていた	生徒に質問や発問を増やすべき
3	雰囲気作りはできていた	16	説明もパワーポイントで内容でわかりやすかった	生徒の表情をみてあげながら説明できると良い
	ゆっくり説明することで生徒が聞き取りやすかった	25.4%	パラリンピックの歴史などわかりやすい説明だった	質問や発問を増やす
4	雰囲気作りはできていた	15	声を通りやすいように生徒の方を見て説明していた	説明の時に無駄を省いて説明の質を上げる
	声の大きさやスピードはよかった	23.8%	レジャー社会について適切な説明をしていた	声の大きさやスピードを考える

表8 「教材」に関する主な記述内容

授業回数	事実と評価	能力カテゴリー別の記述数と割合	評価の理由	改善策
1	スライドなど教材に対する工夫は見られた	10	板書の時間を省き説明の時間を確保していた	文字の色を工夫をすれば良いと思う
	学習効果を生み出すような内容だった	25.0%	背景が暗い色で字の色も暗い色なのでわかりにくかった	生徒が見やすいようなパワーポイントの作成を
	パワーポイントの字の色が見えにくかった			
2	教科書に載っていることしか話していない	12	パワーポイントを活用して無駄な時間を減らしていた	資料は見やすいものを提供するべき
	工夫が少し足りない	30.0%	説明を簡単にしすぎて伝わっていないように感じた	説明の際は具体的な例を出して生徒の興味を引く
3	生徒が見やすいアニメーションが設定されていた	8	授業の最後に小テストを行っていた	最後の小テストの前におさらいをしていればよかった
		20.0%	スライドに必要な文字だけ映し見やすくなっていた	生徒に発言させるような内容にしてみると良いと思う
4	パワーポイントで必要なことをピックアップしていた	10	生徒に考えさせる内容を終盤に行いまとめができた	考えさせる内容を多く取り入れていく必要がある
		25.0%	資料やグラフを用いていた	文字数をできるだけ減らし必要なことのみ伝える

表9 「その他」に関する主な記述内容

授業回数	事実と評価	能力カテゴリー別の記述数と割合	評価の理由	改善策
1	私語の注意はできていた	12	生徒の意見に対して丁寧に説明できていた	しっかりと周りを見て授業をする
	生徒の様子をみながら気配りができていた	25.5%	生徒の反応を伺いながら授業を行っていた	生徒全員の発表をやってみても良いと思う
2	注意ができていなかった	12	寝ている生徒に注意ができていなかった	大きな声や名指しで注意する必要がある
	生徒への気配りがもう少しできたらよい	25.5%	生徒に質問しながら授業をしていた	わかっているか確認しながら授業をする
3	生徒への気配りがもう少しできたらよい	11	忘れ物やプリントの進み具合などがもう少し	集中してもらうため小テストの実施を序盤に伝えるべき
	生徒に対してしっかりと注意できていた	23.4%	生徒に気配りができていた	生徒の理解度を確認しながら授業を進める
4	私語や居眠りの注意はできた	12	一人ひとりにヒントや助言があまりできなかった	生徒の意見に助言ができるようネタを準備しておく
	気配りをもう少ししてきた方がよかった	25.5%	しっかりと説明を聞いていない人の注意ができていた	一人ひとりの気配りをもう少しできたら良い

同様の傾向を示したといえる。また、「教材」についての記述数がほかのカテゴリーと比べると少なく、体育理論における教材研究のあり方について大きな課題があると言える。これについては中学校の保健分野、高等学校の保健科と同様に、体育理論についても十分な授業研究の時間を確保し、体育理論の重要性や教材研究の方法について助言や指導をする機会の確保がより必要になってくると考える。

次に、表5から表9のとおり、記述内容については回数を重ねるごとにより具体的な記述が増えていく傾向がみられた。中川ほかは、自己の「リフレクション」を深化させる際に、保健の模擬授業における座学形式の学習形態が観察者の学生にとって有効であると述べている。特に授業開始前に「RS」を配付して模擬授業に参加させることで、授業の中で気づいた瞬間に「RS」に記入できることが、授業内容についてさまざまな視点で「自分で気づく」ことに影響を与えている可能性がある」と述べている。

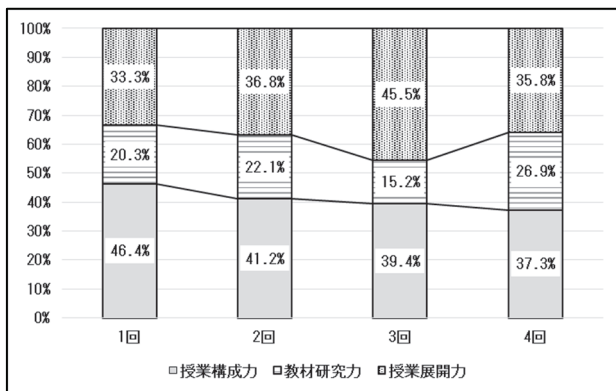


図1 各回の能力カテゴリー別の記述数の割合

また、図1は各回模擬授業の「RS」における能力カテゴリー別の記述数の割合を示している。先述の表4のとおり、模擬授業の回数を重ねても記述数について大きな変化はないものの、授業構成功率および教材研究力に関する記述数の割合は増加する傾向を示し、一方で授業展開力に関する記述数の割合は減少した。この結果は長田ほかの研究結果に依拠するものであり、異なる省察の内容をグループや全体で共有したことで、他者の多様な省察の観点に気付くことができたことに

より、省察の内容が変容したと考えられる。今回研究対象とした授業内では、省察についてグループワークは実施していないが、模擬授業が終了するたびに協議会を実施し、その際に生徒役（観察者）の学生が一人ひとりコメントを述べていること、教員からの助言や指摘が即座になされたことで同様の効果が現れたのではないかと考える。また、本授業では、体育理論の前に体育実技でも模擬授業を実施しており、2年次後期の保健体育科教育法IIにおいても保健科教育の模擬授業でリフレクションを行っている。そういった経験が学生の授業構成功率や教材研究力に影響を与えたことも可能性として考えられる。

しかしながら、体育理論に焦点を当てた全4回の模擬授業だけでは、模擬授業を担当した学生の指導技術などの教授行為の差異によって生徒役の感じ方も大きく異なることが推測され、そのことが「RS」への記述に強く影響すると予想される。今回の研究では、記述数やその割合を中心に記述内容についても着目したが、今後は教師役の学生の模擬授業の力量や経験回数と生徒役の学生の省察力についての関係も検討していく必要がある。

5 まとめと今後の課題

本研究では、中学校の体育理論における模擬授業の実践を通して、「他者のリフレクション」に着目し、体育理論の模擬授業の実態と課題を明らかにしようとした。その結果、次の2点が明らかとなった。

(1) 5つのカテゴリーのうち「教材」についての記述が少ない傾向にあり、体育理論の模擬授業時間の増加や教材研究の方法などについての学習時間を十分に確保する必要がある。

(2) 模擬授業の回数を重ねても記述数について大きな変化はないものの、授業構成功率および教材研究力に関する記述数の割合は増加する傾向を示し、一方で授業展開力に関する記述数の割合は減少した。

このことから、他者のリフレクションを積極的に自

身の学びに活かす授業のあり方を模索していく必要がある。

今後の課題としては、体育理論の模擬授業の回数を確保することも重要であるが、一方で保健や体育の模擬授業も同様に重要であることから、保健体育科教員の養成を担ううえで限られた時間の中で学生の実態に応じながら計画的に模擬授業の回数を設定していく必要があると考える。岩田¹⁸⁾は、教師教育における「リフレクション」する力の重要性から鑑み、「講義型」で最低限の知識を保証し、「演習型」によってその知識を技能や態度に結び付ける、いわゆる「往還」に似た機能が重要であると指摘している。その指摘を参考に、今回調査対象とした授業計画についても再度検討し、学生の模擬授業だけに終始するのではなく、実践の中で教員からの適切なアドバイスや指導を取り入れていくべきだと考える。

今後、教員養成を担う大学において、体育理論の授業研究や教材開発などについて多様な視点から教師の工夫や意見交換がなされることで、より幅広い知識や技能をもつ保健体育科教員が養成されていくことが期待される。

【引用文献】

- 1) 中央教育審議会 (2022) 『『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～(答申)』, 22
- 2) 石井英真 (2013) 「教師の専門職像をどう構想するか技術熟達者と省察的実践家の二項対立図式を超えて」『教育方法の探求』16, 9-16
- 3) 柳沢昌一 (2013) 「省察的実践と組織学習 D.A. ショーン『省察的実践とは何か』(1983)の論理構成とその背景」『教師教育研究』6, 329-352
- 4) 佐藤学 (1993) 「教師の省察と見識＝教職専門性の基礎」『日本教師教育学年報』2, 20-35
- 5) 長田光司、友川幸 (2016) 「保健学習の指導力向上のための模擬授業の効果と課題～省察の変容に着目して～」『学校保健研究』58, 3-38
- 6) 藤田育郎、岡出美則、長谷川悦示、三木ひろみ (2011) 「教員養成課程の体育科模擬授業における教師役経験の意義についての検討—授業の「省察」に着目して—」『体育科教育学研究』27 (1), 19-30
- 7) 木原成一郎、村井潤、坂田行平、松田泰定 (2007) 「教員養成段階の体育科目における模擬授業の意義に関する事例研究」『広島大学大学院教育学研究科紀要第一部学習開発関連領域』56, 85-91
- 8) 村井潤 (2015) 「小学校教育実習における実習生の発言内容に関する事例研究」『体育学研究』60 (1), 249
- 9) 日野克博、谷本雄一 (2009) 「大学の模擬授業並びに教育実習における省察の構造」『愛媛大学教育学部保健体育紀要』6, 41-47
- 10) 久保研二、木原誠一郎 (2013) 「教師教育におけるリフレクション概念の検討—体育科教育の研究を中心に—」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第一部 学習開発関連領域』62, 89-98
- 11) 川口諒、岩田昌太郎 (2015) 「教員養成課程の模擬授業における学生の「他者を対象としたリフレクション」の育成に関する事例研究」『日本体育学会大会予稿集』66, 382
- 12) 中川麻衣子、藤原有子 (2017) 「教員養成における保健の模擬授業の実態と課題の検討—「他者の実践を対象としたリフレクション」に着目して—」『川崎医療福祉学会誌』27 (1), 105-113
- 13) 山田七重、植屋清見、森昭三、中村和彦 (1996) 「中学校・高等学校における「保健の授業」の実態と保健体育教諭の意義」『日本体育学会大会号』43, 560
- 14) 高井聰美 (2010) 「保健教育(保健学習)における模擬授業の効果」『関西女子短期大学紀要』20,23-28
- 15) 岩田昌太郎、久保研二、嘉数健悟、竹内俊介、二宮亜紀子 (2010) 「教員養成における体育科目の模擬授業の方法論に関する検討—「リフレクション」を促すためのシートの開発—」『広島大学大学院教育学研究科

紀要 第二部 文化教育開発領域』59, 329-336

16) 藤田育郎 (2013) 「良い体育授業に対する認識の育成を目指した模擬授業の成果－授業映像視聴による省察－」『信州大学教育学部研究論集』6, 143-152

17) 斉藤雅記 (2010) 「保健科模擬授業による省察能力の変化」『徳山大学論叢』70, 137-145

18) 岩田昌太郎 (2007) 「体育教員養成カリキュラムの改善に関する基礎的研究－「指導法に関する科目」を基軸とした「コア・カリキュラム」の提案－」『広島大学大学院教育学研究科博士論文』

【参考文献】

1) 厚東芳樹、梅野圭史、上原禎弘、辻延浩 (2003) 「小学校体育授業における教師の授業中の「出来事」に対する気づきに関する研究」『教育実践学論集』5, 99-110

2) 七澤朱音 (2007) 「教授技術の向上を目指した反省的授業実践－保健体育科教育実習生による実践を例に－」『日本教育大学協会研究年報』25, 161-170

3) 溝口希久生 (2018) 「リフレクションシートの記述内容からみた学生の学びや課題の特徴に関する考察－「保育内容表現 音楽」の授業を通して－」『東亜大学紀要』25, 1-15

4) 中川明 (2010) 「保健体育の教師はなぜ保健の授業が苦手なのか？」『愛知教育大学保健体育講座研究紀要』35, 63-73

5) 岡崎祐介 (2021) 「高等学校における保健学習に関する調査報告：至誠館大学教職課程（中高保健体育）履修学生に着目して」『至誠館大学研究紀要』8, 153-158

A Study of Current Status and Issues of Reflection on the Trial Teaching in "Theory of Sports and Physical Education" Class in Junior High School - Focusing on the Number of Descriptions on the Reflection Sheet -

Yusuke OKAZAKI Junya OHFUJI

abstract : This research is aimed at attempted to clarify the actual situation and issues of simulated classes in "Theory of Sports and Physical Education" in junior high school. As a result, the following two points became clear.(1) Out of the five categories, there tends to be less mention of "teaching materials" and there is a need to increase the amount of time for mock classes on physical education theory and to secure sufficient study time for methods of researching teaching materials.(2) Although there was no significant change in the number of descriptions as the number of mock lessons increased, the percentage of descriptions related to lesson composition ability and teaching material research ability increased, while the percentage of descriptions related to lesson development ability decreased. For this reason, it is necessary to search for ways to teach classes that actively utilize the reflections of others in one's own learning.